

第6回「泉大津市オリアム随筆賞」

【優秀賞】

子宮と毛布

北澤木綿香・滋賀県

人は毛布にくるまると、母の子宮に浮かぶ胎児のように心安らぐのではないか、私はそんな風に思っている。

結婚して三年が経った頃、不正出血が続くため子宮癌を疑い、産婦人科を受診した。五〇歳くらいの男の先生が診察して下さり、検査を終えた私は、妊婦さんを眺めながら待合室で結果を待った。妊婦というのはそこにいるだけで周りを幸せな気持ちにするのだろう、淡いピンクで統一されたその部屋にいます、不安で張りつめていた心が和らいでいった。

ほどなく私の名前が呼ばれた。診察室に入ると先生が、

「多嚢胞性卵巣症候群ですね」

とおっしゃり、ポカンとする私に不妊症だということの説明して下さいました。私は癌ではなかった安堵も忘れ、不妊症という言葉に激しく動揺した。私たち夫婦は子どものいない人生を望み、二人で仲良く歩んできたはずだった。それなのに、子どもができないと言われるとうしても欲しくなる、愚かで哀れな私がいた。

こうして不妊治療が始まった。小さい頃から我慢強いと言われてきた私だが、長引く治療にくじけ、病院に行くこと自体が辛くなっていった。そこには妊婦さんがいた。ふんわりとマタニティウェアをまとった姿はまぶしくて、うらやましくて、見ていると切なくなった。私はみじめな自分の姿を隠すかのように、いつも待合室のすみっこでうつむいて爪を噛んでいた。

苦しみながら治療を続けて一年、タンポポが咲く季節に私は妊娠した。うれしさを抑えきれず、数日毎の診察では、私も妊婦さんの仲間入りとばかりにピンクの部屋の真ん中に座り、憧れの妊婦雑誌を手にしては、したり顔でうなずきながら読んでいた。

しかし、八週目の診察で事態は急変した。

「北沢さん」

先生の重たい声の調子から、良くないことを言われると直感した私は目をつぶった。聞いたくないことがあると目をつぶる悪い癖だ。

「赤ちゃんが大きくなっていないし心拍もないので、念の為、数日後にまた来て下さい」
目をつぶったところで、先生の言葉が消えるはずはなかった。

三日後、赤ちゃんの死亡が確認された。赤ちゃんはお腹の中で亡くなっていった。悲しむ暇もなく、私は赤ちゃんをお腹から出す手術の手続きに追われた。看護師さんに付き添われて

待合室に座ると、大好きだったピンクの部屋が重苦しい灰色に変わっていた。

手術当日になっても、赤ちゃんはお腹にいた。私のお腹の中が好きなのかな、そんなことを思ったが、手術が始まるとあっけないほど簡単に、赤ちゃんは私のお腹からいなくなってしまう。ちょうど、タンポポの綿毛が風に乗って旅立つ時期だった。

一人、家に帰った私はベッドに横になり、体を小さく丸めて毛布にくるまった。毛布のやさしい感触が子どもの頃のことを思い出させた。

私は長女のためか、甘えることが苦手な子どもだった。弟たちが肩をトントンと母に叩いてもらいながら眠るのがうらやましかったが、忙しい母に「私もトントンして」など、とても言うことができなかった。体を小さく丸めて毛布にくるまり、毛布の柔らかな風合いを肌を感じることで心を満たしていた。毛布にくるまると、母に包まれているような気持ちになったのかもしれない。

相変わらず毛布が好きだな……、私はさらに小さく丸まった。そして想像した。毛布は子宮だ、私は母の子宮の中に浮かぶ赤ちゃんだ。毛布がやさしく私を包む、子宮がやさしく赤ちゃんを包むように。

毛布の子宮に包まれた私の心は、静かに宙に浮き、亡くなった赤ちゃんを思った。赤ちゃんは、私の子宮のお布団で心地よく眠っていただろうか……、私の子宮は、毛布のようにやさしく赤ちゃんを包んでいただろうか……。そんなことをぼんやり考えながら、空っぽのお腹をさすった。不妊症の診断を受けてから初めて泣いた。

あれから十年。小さな娘が口癖のように言う、

「お母さん大好き、ギューして！」

私に似ず、甘え上手な娘はさらに言う、

「お母さんのお腹に戻りたい、そしたら、いつも一緒にいられるのに」

きっと、私の子宮は、あの時の赤ちゃんを毛布のようにやさしく包み、そして大切に守っていたに違いない。娘がまた戻りたいと言ってくれるくらい、心地良い場所なのだから。